

ある中学生の「答辞」

今年8月に刊行された平成22年度『文部科学白書』に、東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市立はしかみ階上中学校の卒業式で梶原雄太君が読んだ「答辞」が全文掲載されたと、NHKニュースで報じられていました。

一人の中学生の記した文章が「白書」に全文掲載されるということは極めて異例のことだそうです。

はしかみ階上中学の卒業式は3月12日、つまり震災の翌日に予定されていましたが、10日遅れて3月22日、同校の体育館で行われました。

卒業生の内一人は死亡、二人は行方不明という悲しい状況のなかでの卒業式でした。

卒業式の模様はテレビで放映されましたが、溢れそうになる涙を懸命にこらえながら、未来へ向かう決意を誓う梶原君の姿に多くの人々は涙しました。

ご存知の方もおられるでしょうが、「答辞」の全文をご紹介します。

「答 辞」

今日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか私たちのために卒業式を挙げて頂き有難うございます。

ちょうど10日前の3月12日、春を思わせる暖かな日でした。

私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を希望に胸を膨らませ、通いなれたこの学舎を57名揃って巣立つはずでした。

前日の11日

一足早く渡された思い出の詰まったアルバムを開き、10数時間後の卒業式に思いをはせた友もいたことでしょう。

「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らず……

はしかみ階上中学といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。

しかし

自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。

天が与えた試練というにはむご過ぎるものでした。

辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は14時46分を指したままです。

でも時は確実に流れています。

生かされた者として顔を上げ

常に思いやりの心を持ち

強く正しくたくましく生きて行かなければなりません。

命の重さを知るには

大き過ぎる代償でした。

しかし
苦境にあっても
天を恨まず
運命に耐え
助け合って生きていくことが
これからの私たちの使命です。

私たちは今
それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。

どこにいても 何をしていようとも
この地で仲間と共有した時を忘れず
宝物として生きていきます。

後輩の皆さん
ほしかみ
階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が如何に貴重なものかを考え
いとおしんで過ごしてください。

先生方、
親身のご指導有難うございました。
先生方が如何に私たちを思って下さっていたか、今になって良く分かります。

地域の皆さん、
これまで様々なご支援を頂き有難うございました。
これからも宜しく願いいたします。

お父さん
お母さん
家族の皆さん
これから私たちが歩いていく姿を見守っててください。
必ず良き社会人になります。

私は
この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。
最後に
本当に 本当に 有難うございました。

平成二十三年 三月二十二日
第六十四回卒業生代表 梶原 裕太

まことに心打たれる答辞です。

大切なものを容赦なく奪われたその悔しさや悲しさは計り知れないものがあるでしょう。しかしそれでもなお彼は「天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく」というのです。

「いかなる苦難に遭おうとも、決して恐れず、ひるまず、他のせいにせず、そのすべてを受け入れ、そうして自らに課せられた使命（助け合って生きていくこと）を果たしていく」と言っているのです。

とても15歳の少年とは思えない強靱で高潔な精神です。

さらに彼はこうも言っています。

…あたりまえに思える日々や友達が如に貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください…

これは、「あたりまえ」が「あたりまえ」でいてくれることを喜び、感謝して生きて下さいということですが、これなどは仏法を極めた人の語る人生観です。

こうしてみますと、梶原君は、人生最大の試練をどのように受け止め、どのように乗り越えていけばいいのか、その確かな道標を私たちに示してくれたのです。

彼のような人を「しょうげしゃ広大勝解者」と言うのでしょうか。

思えば私たちの人生は思いがけないことや思い通りにならないことの連続です。

厳しい現実には足が立ちすくみ、明日への生きる勇気を失いそうになることもあります。心が折れそうになったり、周りのせいにしなくなった時は、震災に立ち向かった梶原雄太君のことを思い出したいと思います。

平成23年12月 「光明寺だより75号」より